

■ 賀川豊彦記念松澤資料館

設計者：阿部 勤 アルテック
 建築主：財団法人雲柱社
 施工者：株式会社竹中工務店
 竣工：1982年
 所在地：東京都世田谷区

人格の社会主義の活動家・賀川豊彦は、J・ラスキンの信奉者で、建築に対しても優れた見識をもつ思想家でもあった。この建築は、設計者が賀川の思想を真摯な態度で学び、その思想を具現化する意図から生まれた。昭和6年の木造教会の保存、シンボリックな中庭、その周囲を巡るギャラリー状の展示空間などが、強い中心性と軸線によって纏め上げられている。様々な諸室に加え、1階には幼稚園も入る複合建築であるが、スケールの点でも、住宅地である周辺環境に突出することなく、打ち放しコンクリートの壁と光の演出によって、世俗とは隔絶した空間を

生み出している。RC造の中に木造教会のインテリアを保存するという手法を採用したことで、“時”を重ねることから生まれる成熟した建築の佇まいを見せる。維持管理の良さは設計時に築かれた施主との信頼関係が今日まで継続されていることの何よりの証であろう。

(審査委員：大川三雄)



現在

撮影：藤塚光政



竣工時

撮影：大橋富夫

■ プーライエ

設計者：藍設計室 鯨井 勇
 建築主：鯨井 勇 鯨井佳子
 施工者：鯨井 勇
 竣工：1973年
 所在地：東京都東村山市

プーライエ初期の下見板張りの古美た、力強く質素な「侘び」の精神に通じる外観写真に、心を強く惹かれた。現地に行って驚いた。あの写真の迫力ある外観はどこにもなく、実につまらない白けたベラベラのサイディングの外観となっていた。「いやだなあ」と思った時、奥様がお迎えに来てくださった。

玄関は狭く薄暗い。なんとなくミステリアスな異次元空間に遭遇する予感がした。宅造時の外部用コンクリート階段がインテリアとして取り込まれ、黒く塗られたペンキは所々は剥落しているが、それがこの家の雰囲気マッチして良い。上階へと続く脇には棚が作られ、本や様々なものが並びその壁は新築当時の板張りのままで深い味わいを醸し出し、空間は数寄屋的でもあり、色々な面白いものが詰まった蔵の中に入っていくイメージとも重なる。ふと見上げると、玄関上部にゴンドラ風の透けた小部屋がぶらさがっている。

さらに上がると、突然急な木箱の階段となる。上りきるとそこは食事室で、大きな窓があり遠くの山々が展開する。窓は道路の延長上に位置

し、景色は永遠に保証されている。食事室から3段下がると、敷地に沿った梯形の変形した居間に至る。下ることにより空間が分節され、それは同時に食事から寛ぎへの気分の分節を演出する。低いソファとテーブル、檜の床は庭の菜園畑と連続し、空間の広がりや伸びやかさは、先ほど上がってきた階段の狭さ暗さとの対照的なヒエラルキーがより面白い。屋根裏寝室への急な階段、玄関上部にあったゴンドラのような奥様の小さな（1帖）書斎とそこへ垂直に降りる梯子等々、この小さな家は京都の忍者屋敷のように面白い。リビングの窓からは遠くに富士山が望め、伸び伸びとした気分が味わえた。外観のまずさを差し引いても、インテリアの密度の高さは25年賞に値すると思った。

(審査委員長：出江 寛)



現在



竣工時

■ 大阪芸術大学 塚本英世記念館／芸術情報センター

設計者：高橋誠一 第一工房
 建築主：学校法人塚本学院
 施工者：大成建設株式会社関西支店
 竣工：1981年
 所在地：大阪府南河内郡

1982年1月号の新建築誌を見た時の衝撃を今でもハッキリ記憶している。それは戦後の打ち放しコンクリートの建築では異彩を放っていた。それは高橋誠一という建築家が世に問う仕事として、個人の人生を結実した瞬間を見た思いがしたのかも知れない。紙面は量感のあるボリュームが人を圧倒するだけでなく、その建築が人の手を介してのみ可能ならしめる繊細な質を持っているコトを既に充分伝えていた。また、建築とはこう云うもの…との思いに輪をかけて「コンクリートが建築になった」という長谷川驍の文章がさらに追い打ちをかけていたことを思い出す。

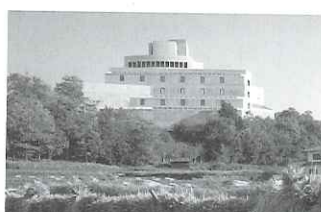
2008年夏、こういった思いとともに実際の建築に触れる機会を持った。ロケーションは小高い山の上であって、思っていたより環境の良い場所に位置していた。そして量感、スケールは想像を裏切らなかった。

外観・内観ともに時を経た落ち着きが打ち放しコンクリートの痛さを消し、学園の建物としての風格に替わっていたように思う。また思いを新たにしたのは、この建築のディテールは見せるためのものでなく、見えないもののためにとられた建築家と施工者による工夫の賜物であるということ。たとえばコンクリートの打ち接ぎ、たとえばトップライトや角度のついた丸窓のハイサイド、たとえばアートホールに張り出した螺旋階段や天井の多面体、たとえばスチールサッシの納めなどなどである。これらのことは同時に維持管理に努められた方々があつてのことと思う。JIA25年賞にふさわしいことは、時を経てこそ伝わること…この建築はそれを教えてくれているのではないかな。

(審査委員：横河 健)



現在



竣工時